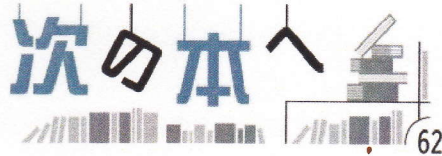


「話し方」指導者

川邊暁美さん(52)



「海からの贈りもの」

「たいせつなこと」

あるがままの自分でいい

「丹田を膨らませて、息を口から吐き出して」。柔らかな声に合わせて、受講生が呼吸を整える。宮沢賢治の文章を朗読したり、自分を紹介するボエムでプレゼンテーションの練習をしたり、さまざまな角度から「話し方」をレッスンする。

NHKアナウンサーとして勤め、県政



受講生に語りかける川邊暁美さん。経営者のほか、社会活動に携わる人の受講も多いという＝神戸市垂水区東舞子町

を分かりやすく伝える兵庫県の初代広報専門員に。現在は主に企業や経営者を対象とした話し方指導を続ける、川邊暁美さん(52)。はた目に華々しく映るキャリアだが、幼い頃はハスキーな声がコンプレックスだった。授業中に発言しても、教師から「はつきりしゃべって」と叱られ、自信を失うことの繰り返しだった。

った。

転機は高校時代。音楽の先生に「個人的な声」とほめられた。実はコーラス部への勧誘で、入部してトレーニングを重ね、堂々と声を出せるように。周囲が自分の話に耳を傾けるようになり「人生が変わった」と振り返る。

本との出会いもまた、人生の転機をもたらした。広報専門員の任期後は、県立男女共同参画センターに勤めていた。畑違いの仕事に、知識を得ようとセンターの本を開く中で見つけたのが、アン・モロウ・リンドバーグ著「海からの贈りもの」だった。

大西洋単独無着陸飛行を成し遂げたチャールズ・リンドバーグの妻である著者が、離島に滞在して女性の幸せについて思いを巡らせる。べわたしたちは(中略)自分が丸ごと受け入れられ、一個の個人として扱われることを切望している

新たな職場で、自分のあり方を模索していた時期だったが「どんな仕事をしても、私が私であることに違はない」と吹っ切れた。話し方の講座を企画し、自身で壇上に立った。「人前で声が震える

る」「話がまとまらない」。受講者の悩みが、かつての自分と重なった。

「特に女性は、周囲に合わせる物わりの良さが求められる」。話し方の技術があれば、自由に思いを表現できるのではないか。「一生をかけて教えていければ」と思い至るきっかけとなった。

同様のテーマで結びつくのが、マーガレット・ワイズ・ブラウン作の絵本「たいせつなこと」。空やリンゴ、草にスプーンなど、日常の物や自然が登場する。それぞれの持つ性質と、あるがままの大切さが語られ、最後に「あなたはあなただと呼び掛ける。

旅先で偶然出会った一冊だ。読み聞かせの会で朗読すると、涙を流して聞き入る母親もいた。

呼吸法や発声、事前の準備など、スピーチの技術は数々ある。だが、根底にあるのは自分らしさだ。受講生にも「あなたの声と言葉で、相手の心をノックして」と伝える。

これからも、「声で握手」をモットーに、発信を続けていく。(太中麻美)

この連載は読書エッセー集「次の本へ」(苦楽堂刊)の関連企画で、本紙記者が各分野の人々に「本から本への渡り方」をインタビューします。

「海からの贈りもの」

アン・モロウ・リンドバーグ(1906～2001年)著、落合恵子(1945年～)訳。94年、立風書房刊。著者自身もグライндナーなどを操り、女性飛行家の草分けとして活躍。文筆家として、夫と共に挑んだ調査飛行の記録「翼よ、北に」などを著した。

「たいせつなこと」

マーガレット・ワイズ・ブラウン(1910～52年)著、内田也哉子(76年～)訳。2001年、フレーベル館刊。著者は児童書の編集に携わる一方、20代後半から創作を始め、42年の短い生涯に100冊超の作品を発表した。訳者は女優・樹木希林の長女。